

Chel.の古典的ケース紹介

22 歳の女性は不安そうな動揺した様子で来て、彼に話した。“何か正気ではない。私はものすごい不安に駆られておかしくなってしまうそうだ。昼も夜も休まらない。まるで私は誰かの死に責任があるかのようだ。”この状態が **5 週間**続いて毎日悪化していった。不安でどんな事をしていても休むことができず、食欲がなくなった。

彼女は喉が渇かなかった。附随する症状は、前に倒れてしまうような目眩、顔のほてり、そして胸部の圧迫を伴う強い動悸だった。彼女は口の中の苦味、硬くて白い黄色がかった便があった。みぞおちと左季肋部が圧迫に敏感であった。**レメディ X**は彼女を健康な状態に戻した。処方は症状に基づいたものであった：落ち着きのなさで良心の不安、まるで罪を犯したかのような、まるで逃げなければならないのにどこにも平穩を見つけられないかのような、また、まるで考えることができなくなって気が狂ってしまうかのような考えを彼女は持っていた。そして、その事はプルービングで明らかにされていた。

私は加えてそのレメディによって治癒された精神的苦痛のあるケースを診たことがある。消化不良があまりなく、乾いた、白い、細い、尖った舌、ワインを渴望し、しかし食欲は僅かであった。精神的症状は落ち着きのなさで良心の不安であった。彼女は許しがたい罪を犯して、果てしなく墮落していくように感じていた。